

Phantom Quest SpinOff-05.

[機械屋の跡取りと幼馴染の話]

「時計屋に持って行くべきだってのはわかってんだ。でもこの辺にはないだろう？」

親父が部品を調達に行っている間は俺が店番をすることもあったけど、その間にお客が来たことなんてほとんどなかった。俺の親父と同じくらいか少し上だと思われるその男は、白髪交じりの髪を無造作に流し、日に焼けた健康的な肌に白い歯が似合っていて男の俺から見てもかっこいいオヤジだった。引き締まった筋肉が薄手のコートの上からでもわかる。

「この親父は腕がいいって聞いてきたんだけどさ、直せないかな？」

そのオヤジが渡してきたのは年季の入った懐中時計だった。

「それは親父に聞いてみないと…」

「だよなあ。何時くらいに戻ってくる？」

「えっと…」

「おそらくあと小一時間で戻ってくると思いますよ？」

俺の代わりにそう答えたのはポーロだった。

「弟か？」

「いや…」

「幼馴染です」

ポーロはぺこりと頭を下げた。

「小一時間か…。まあ、待てなくはねえか。ここで待っててもいいか？」

「どうぞ」

ぶっきらぼうに答えた俺とは違って、ポーロは「こちらでお待ちください」と椅子を勧め奥へ引っ込む。オヤジは椅子には座らず店内をきょろきょろと見廻りながら話しかけてきた。

「お前がここの跡取りか？」

「……いずれ」

「ふーん。いずれ、ね」

オヤジはにやりと笑いながらやっとな椅子に座った。そこにポーロがお茶を運んでくる。

「熱いお茶でよかったですか？」

「お、ありがたい」

「はい、マルコ」

「サンキュ」

オヤジはズズズ…と一口飲むと「ほお」と感心したように言った。

「うまいな」

「この辺りで有名なお茶っ葉なんです」

「いやいや、茶葉の美味さもあるんだろうけど、淹れ方が最高。お茶ってのは淹れる温度が大事だからな」

オヤジの言葉にポーロが目を丸くする。

「…はい」

「別にいつもとおんなじ味だけど？」

俺には全然わからない。

「旨味生かすためにちょい低温ってことだな」

「はい。マルコは渋いの苦手ですから」

「なるほどねえ」

俺のよくわからないところで会話が進んでいる。なんだか少し面白くない。

「二人はいくつなんだ？ あと…名前も」

オヤジは先生みたいな口ぶりで聞いてきた。

ポーロが俺の顔を見る。俺から答えろってことか。

「俺はマルコ。今月末で14になる」

「僕はポーロ。13歳です」

オヤジは目を細めて笑った。

「可愛い頃だよなあ…。いやさ、俺にも息子がいるんだよ。今年で26だか7の。もう全然可愛くはないからさ（笑）…二人見てっと懐かしいよ」

ってことは親父より全然上なのかな？この人。

「ん？ 二人はトレハンに興味あんのか？」

「「え？」」

急に切り出された話題に俺とポーロの声がユニゾンした。

オヤジの視線の先にあったのは、受付の台に無造作に置かれた新規クエスト募集要項。

「あー、えっと…実は二人でクエストに参加したりしてて…なあ？」

「…うん」

「ほお」

オヤジの表情がちょっと翳ったのを感じてか、ポーロがすかさずフォローに入る。

「あの…もちろんまだ規定年齢に達していないので、正規のクエストには参加できないんですが、実は最近プレクエストっていうのが出来て、トレハンを目指す人たちや趣味程度にクエストを経験してみたい人たちが参加できるんです…」

オヤジが豪快に笑う。

「……？」

「あー。笑っちゃってすまねえ。いやさ、それ管理してるの俺だからさ」

「…え？」

「俺、元レガポなんだわ。知ってるだろ？ レガシーボリス」

「も、もちろん！！」

二人してブンブンとうなずく。

「去年定年でレガポとしては一線を退いたんだけどな、今はレガポOBとしてサポートに回ってんだよ。最近は年齢ごまかしてクエストに参加する奴らも結構いてさ…、まあ、やっぱ危険だからよ。だったら、研修っていうか…そういうのをちゃんと設けてやった方がいいんじゃないか？ ってトレハン協会と相

談して今実験的にやってるとこなんだわ。そーかそーか。お前ら、興味があるんだな。トレハンに」
元レガポと聞いて納得した。日に焼けた肌も、鍛えられた体も、放つオーラも。

やべえ。かっこいいぞ。この人。

「トレハンのどこがいい？」

オヤジはにやりと笑って聞いてきた。

俺とポーロは顔を見合わせる。

「二人で一つの答え出せなんて言ってねえよ（笑）それぞれの惹かれた理由が聞きたい」

この人の豪快な笑いは気持ちがいいなあ。

「俺は…」

言いかけて、自分の初めての冒険ってやつを思い出してみる。あれは…確かに冒険だった。

「もう 3 年くらい前だけど、どうしても手に入れたい薬草があって…、その、俺のお袋…もういないんだけど、病気にしててさ…。それに効くって言う薬草を調べて、ポーロ誘って一緒に採りにいったんだ。

って言っても隣の森までのちょっとした…『冒険』とも呼べないようなやつだったんだけどさ。

でもちゃんと薬草は手に入って…、お袋、めっちゃ喜んでくれて…。ま、残念ながら死んじゃったけど」
セッカチな俺にしては割とゆっくり言葉を選んで説明できたと思う。

オヤジはしっかりと俺を見つめて聞いてくれていた。

「…それからしばらく経ってからも、薬草採りに行ったあの日のことが忘れらんなくて…。ってポーロに言ったら…」

「僕もおんなじ気持ちだったから…」

「何があったってわけじゃないんだけどさ、手に入れたいってモノがあって、それをポーロと一緒に協力して探すってのが、なんか…ものすごくワクワクしてさ…」

「うん」

オヤジがたまらなく優しい目をしていたから、俺は言うか迷っていたことを話し始めた。きっとポーロも許してくれるはず。

「本当は一回だけ年齢黙って本当のクエストにこっそり参加したことがあるんだ」

「…マルコ？」

「お？」

オヤジは面白そうに口笛を吹いた。

ポーロが不安そうに俺を見つめる。

「続き聞かせろよ。…ふっ。大丈夫だよ。今は懐中時計を修理してもらいに来たただのオヤジだから」
悪戯っぽく笑ったオヤジがこれまたカッコよくて、俺は心の中で「ひゅ～！！」って叫んだ。

ポーロも安心したのか、小さく頷いてくる。

俺は話を続けた。と言っても大した話じゃないんだけどさ。

「初級のクエストだったけど…。全然ダメだった。ボロボロ…。全くついていくこともできないし、『もうここで引き返せ』って言われて、黙ってそれに従うことしかできなかった」

「…うん」

「それが悔しくてさ」

「うん」

「だからちゃんと胸張ってクエストに参加できるように、今はプレクエストで経験を積もうって話し合
って…」

ポーロを見ると、大きく「うん」ってうなずいた。

ズズズ…とお茶を一口飲んでからオヤジは、

「いいバディだな」

と言った。

胸の辺りがじんわりとあったかくなるのがわかった。嬉しかった。

「一昔前はバディなんて必要ないって風潮もあったが、やっぱりバディは大事だ。窮地に陥った時、一人
だと判断を見誤ることがある。どんなベテランでもだ。だが、信頼のおけるバディがいると違う…」

ズズズ…。

「このお茶、冷めてもうまいな」

「おじさんは、どうしてレガポになったんですか？」

俺の聞いたかったことをポーロが口にする。

「…もう一杯くれたら話してやるよ」

× × ×

「昔、この町の外れに小さな時計屋があったんだ。…お前らが生まれるよりずっと前の話な。

小さい店内に時計が所狭しと並んでてさ、チクタクチクタクうるせえのなんの」

オヤジの滑稽な物言いに、俺とポーロは思わず笑う。

「そこの跡取り息子がいてさ…、俺の親友だった」

オヤジはチラリと俺を見た気がした。跡取りって言葉がちょっとだけチクリと響く。

「手先がものすごく器用でさ、俺はそういうのからっきし駄目だったからいつもすっげえなって見てた。
ある時そいつが急に言い出したんだ。『一緒にクエストってやつに参加してみないか？』って」

「え？」

「別にそいつはトレハンでもなんでもねえよ。ただ、あの頃は結構あったんだ。貴族たちが趣味でクエス
トを立ち上げて、参加者を広く募集して賞金を賭けるようなやつ。…まだ協会もしっかり機能してな
かったから取り締まろうにも把握できていないのが実情だった。

…ま、小さな時計屋だったからな。いつ潰れんだよ？なんて冗談で言ってたけど…、本当に結構やばかっ
たんだなって…今ならわかる。そいつは真意を教えてくれなかったからさ」

「その人とクエスト参加したのか？」

「いや、俺は全然興味なかったからなあ。トレハンにも、賞金にも。だから『お前一人でいけばいいじゃ
ん』って…」

ズズズ…。

「あー。うまい」

オヤジの目はいつだって優しい。なのに、少し寂しそうな色が見えたのは気のせいだろうか。

「さっきも言ったようにその頃はバディ無しが普通だったし、協会も介入していないような無法地帯…。
俺は帰る日時しか知らされてなかった。…そして、帰ってくるはずの日を過ぎてもそいつは帰ってこな

かった」

「……」

「時計屋の親父に問い詰められたよ。『旅行に行くと言って出て行ったきり帰ってこない。何か知らないか?』って…。クエストのことは言えなかった。

俺はクエストを立ち上げたっていう奴を突き止めた。…が、何もわからない。の一点張り。

参加者とは『一切の責任は負わない』という契約だったと言われちゃ、何も言い返せねえよな。それを承知で参加したのはあいつなんだから…」

オヤジは壊れて動かない懐中時計を握りしめた。

「それから?」

ポーロが遠慮がちに口を挟む。

「俺は探しに行ったよ。山の奥の奥の奥…までな。どっから探せばいいのかなんて見当もつかなくて…でも他にできることはなかったから…。そして遭難しかけたのは俺だった。そこを助けてもらったんだ。…レガシーポリスに」

カチ…カチ…。懐中時計の蓋を開いては閉じる音。

「あのクエストで行方不明になった奴は数名いたらしくてさ…『君の親友は必ず見つけ出す』と肩を掴まれた手が本当に遅しくて、すげえかっけーって思っちゃったんだよな。その時（笑）

…数日後見つかったのは、冷たくなったあいつだったけど。

でも、『ばかじゃねーのお前!』って文句を言って、あいつの胸をどつくことはできた…」

オヤジは鼻を吸ったが、聞こえていないふりをする。

「時計屋はその年の冬にひっそりと店を閉じた。その時、時計屋の親父から渡されたんだよ。あいつが初めてデザインした懐中時計だって。出来上がったら俺に渡すつもりだったって」

「……」

オヤジが俺に懐中時計を渡す。

「だからさ、しっかり直してもらわないと困る」

「…ここ、機械屋ですよ」

「だよな。それはわかってる（笑）」

「でも親父さんなら大丈夫です。本当に腕は確かですから。っていうか、マルコもいけるんじゃない?」

「は?」

本当こいつ（ポーロ）ってこういうところあるよな。なんて言うか急に爆弾投げる的な。

「お? お前やれんの?」

オヤジも乗っかってくるしさ。

「いや、でも…さあ」

「小さい頃から親父さんの手伝いやってたし、本当に器用なんですよ。マルコはなんでもすぐ出来ちゃうし、ねえ!マルコなら直せるよ」

「ちょっと待て!…おいポーロ」

「何?」

「今さ、この懐中時計がすげえー大事なもんだって話聞いたわけじゃん?」

「うん」

「そんな大事な時計をさ…」

「そんな大事な時計だからじゃない？」

「え…っとさ…。ポーロ？」

ポーロの真っすぐすぎる目が突き刺さる。ちょっとお前、それさ、卑怯っていうやつだぞ。

「マルコなら出来る」

その信じて疑わないよ！って目だよ。っざけんなよ？！

「……」

豪快すぎる笑い声が店内に響く。

「そーいや、お前…えっとポーロだっけ？」

「はい」

「お前の理由、聞いてないな。ほら、どうしてトレハンに興味をもったのか？ってやつ」

「…あー、それは、大したことじゃないです」

「いいよ」

「……」

ポーロがちらちらと俺を見てくる。ん？何？俺に何を求めてんの？

唸るように俯いたかと思ったら、

「……マルコがやろうって言ったから」

消え入りそうな声でそれだけ言ってそっぽを向いた。

俺が…やろうって言ったから…。

バッチーン！！

「ってええー！！ え？ え？」

俺の背中思いっきり叩いたのはなんでえ？ マジで痛いんだけど…？！

音にびっくりしてこっちを向いたポーロをじっと見つめるオヤジ。その目を逸らすことができなくなったポーロ。

「それ、大した理由だろ」

オヤジの声が染み渡る。

「……」

ポーロが、噛みしめるようにうなずいた。…なんだよ。めっちゃいい顔してんじゃん。何それ。

俺の背中の中のジンジンとした痛みと熱は当分引かなそうだけど…。

ま、いっか。ポーロのこの顔が見れたし。

「おや、お客さんかい？」

間延びした声に「おかえり」と返す。ワンテンポ遅れて「おかえりなさい」とポーロの声がするのもいつもの光景。

「時計屋に持って行くべきだってのはわかってるんですけど…」

親父に懐中時計を渡す。

「…おお。素敵な懐中時計ですね。見事なデザインだ」

「……はい」

「ちょっと調べてみましょう」

親父が工具箱を取り出し、作業に取り掛かる。

それをじっと見つめるオヤジ。ポーロはいつの間にか新しいお茶を淹れてきたようだ。本当気の利く奴。

俺は…

作業する親父の背中を見つめた。

結構好きなんだよな、この背中。決していい姿勢とは言えない丸まった背中。細められた目の奥の光。繊細でしなやかな指運び。穏やかな呼吸。

まるで神聖な儀式のようだ。…なんて親父に言ったことあるわけないけど。

親父、俺はちゃんと尊敬してるよ。親父のこと。

「巻真が少し破損しているようですね」

「直せるんですか？」

「ええ。少し預からせていただけますか？」

「はい」

オヤジを店の外まで見送る。すっかり夕焼け色に染まっていた。

「なあ…」

俺の呼びかけにオヤジは「どうした？」と振り返る。

「息子がさ、親父の背中を追っかけるのって…どう思う？」

「……」

オヤジの沈黙がなんだか怖くて俺は言葉を続ける。

「いやさ…、いずれは…いずれは継ぐんだって思ってる。…んだけどさ…」

「噂通りだったよ」

「え？」

「まだ修理は済んでないけど、さっきのを見ただけでわかる。噂通り腕がいい親父さんだ」

「…うん」

「そんでお前がちゃんと尊敬してるってのもわかる」

「…うん」

「今は、それでいいんじゃないか？ いずれちゃんと話す時が来るよ」

「そういえば…」

ポーロが遠慮がちに尋ねる。

「おじさんの息子さんは？」

「レガポなりたてのホヤホヤ」

そう言ったオヤジの目に深い愛情がにじんだのがわかって、なぜだか俺は嬉しくなった。

「へえ」

「まあ、あいつも色々あったみてえだけど…、たぶん俺の経歴なんかあつという間に追い越して、超優秀なレガポになるだろうなあ。楽しみだ」

オヤジはにかっと笑うと「じゃあ」と片手を上げて、颯爽と去っていった。帰り際までかっこいいとかずるいぜ。

残ったのは、二つの長い影……。

「ポーロ」

「何？」

「俺はさ…お前じゃなかったら、やろうって誘ってなかったから」

「…え」

「あ、いや、なんでもない」

俺はそそくさと店に戻りさっさとドアを閉める。

「…え、ちょっとマルコ！！」

追いかけてきたポーロがドアをドンドンと叩く。

あーもー。なんか勢いだけでらしくないこと言っちゃまった…///っ。

「なんだ騒がしいぞ」

親父の怒りを買う前に俺はさっさと部屋へ退散した。

「ねえ！」と言いながらポーロが部屋をノックするまで…あと 10 秒。

オヤジに憧れた息子が、結構高い懐中時計を奮発して手に入れたのは、また別の話……。

SpinOff- 05. fin.